

通信

一書拜呈仕ます

先生にはいつも御清榮で遠くから大慶に存じて居ります、小生五月號に「畫室」を掲載されたにつきて感謝の意を表したいと思ひます、二三ヶ月前から、先生をはじめ春鳥會幹部諸賢の畫室の模様を漏して下さつたならどうか遠國に居つて東都を望んでゐる人々を樂しませる事が出来るだらう、自分にとりては昨年六月初めて聲咳に接した當時を想起して向上心を強からしむるからは非く「畫室」の掲載を願ひ度、御忙しいなら先生の分だけは臆る氣な自分の腦裡に残れる印象によりて綴らうと思つた事がありました四月二十九日雨を衝いて一里半を徒歩で四半身二十六錢の鮪に餓えた腹を満たさうとしてゐる夕、水繪が届いた、目錄を見て最も嬉しかつたは「畫室」といふ題目でした、三杯目の御飯を中止して閲讀をして行くと先生や、畫室といふものに初めて接した昨年の有様が彷彿として眼前に現はれる、畫室の四壁を見廻はしたが今度の御文の様な細い點までは觀察が及ばなかつた。併し、石川先生のジャンクの畫や石膏像等は眼に残つてゐる何故客觀的に御書き下さらなかつたかと存じて少々殘念に思ひます。

玄關をはいつて桃色鸚鵡に驚いた、この鳥籠の土臺になつてゐる旅行鞆は外遊當時の物であらう、畫室の入口が階段の直そばなので危険でないかと思つたり、机の上に置かれた除蟲菊の盆

莖に感心したり、パレットを見て、先生も油繪を描くのだなと考ひたり、小西のカタログを見て寫真をなさると思つたりして畫室でキヨロ／＼してゐると先生が御出になられた懇ろに御談下された事は今でも忘れられない事柄であります四壁に掲けてある畫の中では、ジャンクの繪葉書の東傍にある波止場らしい船尾の少し見えて、豌豆の葉色をした海の見えてある畫が一番氣に入りましたあれを『みづゑ』の口繪にして下さると良いがとは今でも思つて居ります。

北の窓の下半に掲げてある色布は、朝夕あの坂を通る幾百の學生の憾の種れとなつてゐる、あの色布のあるために、畫室の壁にある畫がよく見えませぬ、私の友人で獨逸協會學校へ通つてゐるものがいつもいつておます、「アノ布がナイト良イナ」と先生が御作業中は左様はいくまいが御用のない時はあの色布を徹して畫室を路行く人に見せられたら趣味の普及にも影響する事が多いであらうと思考して居ります、こんなことをいつて御叱りを受くるは自信して居ります。

殆ど半歳も御批評を頂かず殘念と思ひ本月はと思ふて諍物二枚を仕上げ今一枚をと思ふ矢先の四月十七日、突然、校長といふ厄介な職務を命ぜられ、その爲め九年間の帳簿の整理、事務の引繼等のため二十日も過ぎ去りてまた／＼機を逸し申しました、近く、當町女子部校を引受くやも計られず多忙に多忙と相成ますが圍碁も酒も煙草も嗜まない私は散歩とテニスと水彩とは又とない慰安でありますから今まで程には行かずとも引つゞきア

マチテアとして研究をつくる積りなれば不相變御批評を願度と存じます先日日本縣師範生參り、種々水彩畫の談を致し、同趣味の人の訪問し吳るるは悪い心地は致さぬものに御座います。

四月三十日

大下先生

玉案下

寄書

宇都宮 長澤 北斗

流行の弊

一にも水彩畫、二にも水彩畫、近年の水彩畫流行は實に驚くべきである。畫といへば直に水彩畫を指す位、墨繪などは殆どひそんでしまつてゐる。雜誌などを見てもすぐに肉筆の繪葉書交換が目につく。水彩畫を知らない人は話せない世の中とはなつた。併し此の流行は一面面白からぬ傾向を生じて來はしないか。流行もよいが元來この藝術なるものが、衣服其の他の裝飾品のやうに軽々しい流行を來しては面白くないと思ふ。否流行といふ言葉をつかはれるやうになるのは斯界の爲によるこぼしくないことではあるまいか。

一寸外に出ても屢々遭つてしかもよく目につくのは書架、三脚をかついでゐる人である。我輩も少しは畫に興味を以つてゐる

から、參考の爲めに畫く所を拜見したいと思つてひそかにあとをつけて見ることもある。どこか目的があつて行くのであらうと思つたのは、とんでもないまらびひ。只甲の通、乙の巷とかんげんをさげてあるいてゐるばかりである。そして女學生でもふりかへつて見ると大の得意。景色を賞するでもなく、寫生するでもなく重い荷物を持ちくされにして、かへつてしまふのである。ぶくにも程があるではないか。これは極端な例ではあるが、とにかくかういふ傾向をうんで來たのはまことにさんねんである。一面社會のつみてあらうがそればかりでもあるまい。

水彩畫の流行は又商人の乗ずるところなり、ずいぶんひどい畫を敷及させてゐる。一寸繪葉書屋にいつて見ても、ずいぶん水彩畫の數はあるが、水彩畫といつてゆるしてもよいのは殆どない。原畫ですらあやしい畫家のかいたものを版がまた實に粗末であるから、できあがつた畫は原畫のげの字の趣もない。同一のもの二枚くらべて見ると、りんかくだけは、版であるから同一であるが、色の趣は春と秋、朝と夕ほど違ふ。これが地方の人の畫をならふ殆ど唯一の手本となるのであるから實に危険ではないか。これを水彩畫だといひ、之にならつてきたものも水彩畫だといつてゐる。殊に繪葉書などにある、極めて簡単な單調なものにならつたのであるから、出來上つたものは實に模様出來そこないの様なものである。水彩畫といふ觀念これより外には出ないのであるから、心ある人がこれを手本にしてはだめだといつたところが何ともしかたがないのである。大家の